〔東京家政大学研究紀要　第42集 (1), p.1～9, 2002〕

食の政治学とジェンダー・システム

――マーガレット・アトウッド『食べられる女』

伊藤　節

（平成13年10月4日受理）

Politics of Eating and Gender System

――Margaret Atwood's *The Edible Woman*

Setsu ITOH

(Received on October 4, 2001)

キーワード：食べること，カニバリズム，青ひげ
Key words : Eating, Cannibalism, Bluebeard

序

現代カナダの代表的作家であるマーガレット・アトウッド（Margaret Atwood, 1937～）はトロント大学英文科からハーバードの大学院に進み，帰国後大学で教鞭をとりながら最初の長編小説『食べられる女』（*The Edible Woman*, 1969）を書いた．世界的注目を集め出したのは二作目『浮かびあがる』（*Surfacing*, 1972）からである．その後1985年に発表したジョージ・オーウェルばりの衝撃的近未来小説『侍女の物語』（The Handmaid's Tale, 1982）で評価を決定し，一躍世界の作家となった．2000年には『昏き目の暗殺者』（*The Blind Assassin*, 2000）でブッカー賞を受賞し、またノーベル文学賞候補にものぼっている．

北米におけるポストモダニズムを代表する存在ともいわれている彼女の作品の魅力，特徴は何と言ってもその巧みな物語性，そして一見ファンタスティックな物語の中に社会規範や権力のからくりを透かしだしていく手法にある．加えてゴシックとも称されるスリラー的エンタテイメント性である．しかもそれは決して架空のものではなく，現実の社会が喚起するイメージにしっかりと根ざしている．話題作となった『侍女の物語』では，出生率が極度に落ちた社会において「食物」と「言語」を管理され自由を奪われた女性が，ひたすら妊娠可能な子宮をもつ道具として扱われるファシズム的恐怖世界が描かれている．現在ますます増えつづける環境汚染，エイズ等の病気の蔓延などを考えても，それは独特のリアリティをもって迫ってくる．必ずしも多くの事件が起こるでもない小説世界で，「恐怖」という感覚を呼び覚ますことで、あたりまえとして受け入れている社会体制や価値観を疑わせるねらいがここにはある．ゴシックロマンスのホラー，スリルが「現代の恐怖」に巧妙にすり替えられた作品を読みながら，読者はこの社会の現実こそまさにゴシック的世界であることに気づかされるのである．

このように彼女の作品は，面白さの中にも常に明瞭なアジェンダを提起している．アンジェラ・カーター（Angela Carter, 1940～1992）と同様彼女は本質的に政治的作家なのだ．[1] 彼女にとって「政治」とは社会における人間の関係性の力学，支配と被支配の問題と同義であり，彼女はこれにぴったりと寄り添うように創作をしている．そうした姿勢が1972年に出された『生き残ること』（*Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature*, 1972）というユニークなカナダ文学論に象徴的に表されている．カナダは1867年にイギリス帝国初の自治領として独立はしたものの，ケベックのフランス系カナダ人、先住カナダ人などとの関係，さらに外部ではイギリス本国，アメリカ合衆国という威圧的な存在によって常に影が薄く，弱者，犠牲者の立場にある国で

教養部

あった．このようなカナダが生み出した文学では、主人公は自己の運命に受身でありことが多く，彼らにとって何よりも大切なことは「生き残ること」であるとアトウッドは述べている．[2] 弱者の立場に甘んぜず受身的姿勢から脱皮し、自国のアイデンティティを確立する必要のあるカナダおよびカナダ文学の問題と、女性が抱える問題は非常に似通っている．アトウッドはこの共通項を遠い視野に入れながら書いている．食うか食われるかの極めて困難な状況をいかに生き延びるか，これがアトウッド文学に内包される命題であり，その意味では彼女を抵抗文学の作家とも呼びうるだろう．ラブロマンスに「人食い物語」を巧みにしのばせジェンダー構造に揺さぶりをかけようとする『食べられる女』はレジスタンスとサヴァイヴァルをテーマとした作品であり，最もシンプルな形でアトウッド文学の持ち味とその方向性を示している．比較的地味なものとして扱われてきたこの作品が注目され始めている．理由はブッカー賞受賞作『昏き目の殺人者』でもわかるように，現代社会の有り様を反映し，ますます複雑に謎めいてくる彼女の作品解明の糸口を提供しているからだと思われる．本稿ではアトウッド文学全編を通じて現れる「食」とジェンダーの問題を『食べられる女』を中心に考えるものである．

1『食べられる女』を取り巻く環境

『食べられる女』は1969年ようやく出版された．作者を取り巻く社会環境のせいで奇妙にグロテスクな味が前面に出てしまったこの作は出版社がしぶったらしい．このあたりの事情はアトウッド自身がヴィラゴ版の序文で述べている．作品が実際に執筆されたのは1965年彼女が24歳のときである．それから4年後の出版時期は，北アメリカでフェミニズム運動が興隆した時期とちょうど重なるものであった．当然ながら作品は即座にフェミニズム運動の所産と考えられた．たしかに当時多くの人たちがそうしていたように、アトウッドも運動の原動力ともなったベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』やシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』を部屋に鍵をかけて読んではいたが，運動は視野に入っていなかったらしい．そのようなところから『食べられる女』を「原(proto)フェミニズムの書」と見てみると，その面白さと独自性がより鮮明になってくる．[3] トロントを舞台としたこの作品には当時の社会的環境を色濃く反映し，出口なしの女性の精神的危機が描かれている．まさに1960年代以前のカナダの状況は女性達にとって窒息状況にあったといえる．カナダは主に西ヨーロッパからの輸入文化，言い換えれば，男性の優位，英国および白人の優越性を「真実」とみなす文化を受け継いでいた．教育、宗教の根幹レベルがこの文化に侵蝕されていたから女性のみならず文化的少数集団への差別的扱いはまかり通っていたのである．特に女性の場合，ふさわしい場所は「家庭」であったため，高等教育を受ける女性も少なく，またたとえ受けても，社会においては彼女達は常に女性を男性の下位におく「女性の仕事」に閉じ込められるのが実情だった．家庭生活においても，妻はあくまで従属的配偶者であり，夫は彼女にかなりの強権を振るうことができた．ここに変化の兆しが現れるのは60年代に入り自由を求める「新しい波」が押し寄せてきた頃であった．『食べられる女』が出たのはちょうどこの時期であり，それはまたカナダが文化的少数民族と女性への不平等を改善しようと取り組み始め，かつカナダそのものが植民地的殻を破りはじめた時期でもあった．

2『食べられる女』における食べ物

文化的価値や真理は社会的に構築される．実際資本主義的、家父長的な文化と，そこに生み出されるストーリーとは互いに補強し合い実に緊密な関係にあるといえる．女性の人生を巡って構築されたストーリーの優等生はいうまでもなくラブロマンスである．愛する男性によってヒロインは紆余曲折の末に救われて（プロポーズされて）めでたしとなる．女性の成熟にはこのプロセスが欠かせず，文学のブロードウェイはこの種の多様なストーリーで満ちている．女性たちの感性の遺伝子レベルにまで組み込まれたこの強力なストーリーの枠組み，鋳型を崩すことは至難の業で，たとえばドリス・レッシングの『黄金のノート』(*The Golden Notebook*, 1962)）は，それとの凄まじい「格闘」を描いたものとして20世紀の記念碑的作品となっている．自分自身の新たな人生の価値を求める小説を書こうとしても，紡ぎだされるストーリーはすべて押し付けられたものばかりで、作家であるこの小説の主人公はその創作のために狂気まで代価として引き受けなければならなくなる．

『食べられる女』でアトウッドが試みているのは，ゴッシック風ラブロマンスのパターンをそのまま踏襲しながら，内部からこれを侵蝕していくというものである．主人公は大学出の若い女性マリアン・マカルピン

(Marian MacAlpin). 仕事をもって独立し，友人のエインズリー（Ainsley）と共同で部屋を借りて住んでいる．仕事は無論満足するものとは程遠い．おまけに経理のグロト夫人（Mrs.Grot）から望みもしないのに年金に強制加入させられる．考えも及ばないはるか先の未来にあらかじめ作られた自分の像を見てしまいマリアンは動揺する．旧式の電気ストーブで暖められたわびしい部屋の先に一生独身で過ごした大叔母のように，たぶん補聴器などつけて座っている自分だ．結婚はこの状況から救われるために必要な手段となってくる．こうして物語は，マリアンを取り巻く友人達の生き方を織り交ぜながら，彼女とそのボーイフレンドである(Peter)との関係を結婚直前まで追って展開していく．

ピーターは出世コースを歩む野心的な法律家．おまけにとびぬけてハンサムでファッション・センスも抜群の青年であり，要するに二人は人もうらやむカップルである．いまだに相手を見つけることのできない友人達の羨望のまなざしをマリアンは意識する．二人がそろって外出する時，鏡に映った自分たちの似合いの姿にマリアンがまるで他人事のようにこれをすばらしいものと納得する示唆的なシーンがある．実はこの小説が一貫してスポットを当てているのは，身体感覚と結びつけられたマリアンの「無意識」である．ピーターとの関係は最初から問題をはらんでいた．マリアンは意識のレベルでこの関係を「いいもの」として受け入れながら，伝統的男女観と結婚観をもつ極めて保守的なピーターとの関係が進むにつれ，自分というものの実感がつかめなくなり，身体に違和感を覚え始めるのだ．身体が浮遊したり，あるいは溶け出していく感覚に襲われ，特定の食べ物が食べられなくなり，次第にその摂取不可能な食品リストは増えていく．最後には何も受けつけず，自分に対するコントロールがまったくきかなくなってしまう．幸せな結婚に入ろうとするマリアンの自己消滅への恐怖と飢餓感，そこに集中するマリアンの意識を巧みに表出しているところにこの小説の特質がある．奇妙なことに飢餓を描く『食べられる女』は食べ物で満ちている．小説の始まりからミルク，シリアル，パン,ピーナッツ，缶詰のライスプディング，コーヒー，デニッシュペストリーといった食べ物があらわれる．これらをすべてマリアンは昼食前に食べるのだ．というより登場人物達はたいてい食べている．食べる行為を通じて人物が描かれる．したがって舞台としてキッチンやレストラン，オフィスや家でのティーパーティー，さらに台所の小道具，食器の類が頻出する．

ところでここで想起されてくるのが20世紀フェミニズム文学の旗手ともされるヴァージニア・ウルフの『自分自身の部屋』（*A Room of One's Own*, 1929）である．あまりにも有名なエッセーではあるが，ここでウルフが食に関する文学上のタブー破りを行っていることは案外知られていない．それは次のようなものである．従来小説においてたとえ午餐会の場面などが描かれるにしても，大事なことはその場で語られる機知にとんだ言葉ばかりであるとしてウルフは次のように続ける．「小説家がご馳走について一語でも割くことはめったにない．スープや鮭や鴨肉などは少しも重要ではなく，誰一人葉巻も吸わず，ワイン一杯飲まないとでも言うようだ．だが私は今勝手にそのしきたりを無視して、その日の午餐について報告しよう」.[4] こうしてウルフは,「白いクリームが上掛けのようにまんべんなくかかったカレイにはじまり，硬貨のように薄いのにさほど固くないポテト，葉はバラの蕾に似ているが，それよりもみずみずしい新芽などが添えられ，申し分のない辛口と甘口のソースを伴ったヤムウズラの焼肉や、黄色、深紅色にきらめくワイングラス」[5]等々を得も言われないタッチで楽しそうに語りつづけるのである．女性の経験やリアリティを自分自身のストーリーとして語るためには最もよく見知った領域が大切だとして，ウルフは台所や、食事を創作に盛り込んでいった.「言語」では表しにくい食べ物，料理の味，色，香りといったものを描出することは新しい自己表現の形であり，ウルフにとってそれは女性の解放と究極的につながっていったのである．にもかかわらずウルフは，他人のためではなく「自分自身」に対しわずかでもおいしい料理を供するということがとうとうできなかった．狂気の発作は拒食、無食欲と重なり，夫と精神科医によって管理された食べ物を強制的に摂取させられる生活が自殺するまで続いた．ウルフの文学は健康的食事と拒食の緊張関係から生まれたともいえる．

『食べられる女』における食べ物の氾濫は明らかにこの延長線上で解釈することができる．アトウッドの意図は，文学上で男の食べる行為はふんだんに描かれても女たちの食べる行為，およびその食欲の表現が抑圧されてきたことへの反逆である．さらに，食べるという行為を通じて社会における男女役割，およびその関係性を分析し，そこに秘められている略奪的性格を暴きだそうというものである．

3「食べること」と「食べられること」

なぜ女性の食べる行為やその食欲の表現は抑圧されてきたのだろうか．食べるということは，肉だろうが野菜だろうがあるいは人間だろうが「他」を呑みこみ（殺して），消化し，自分の栄養にしてしまう行為であるから，そもそも残酷でグロテスクなものであり，だからこそそれは象徴的に力，権力の表現ともなりうる．食べる側は強者，食べられる側は犠牲者である．『食べられる女』において，女性がすべて食べ物との関係を通じて描出され，無食欲、万年飢餓感に結びつけられているのは，社会における彼女達の弱者，犠牲者としての立場を透かし出すために他ならない．たしかにはじめの頃のマリアンを含めて，女達はひっきりなしに食べている．が，彼女達の食内容を見れば，その貧しさに唖然とする．たいていいいつもスナック，冷凍インスタント食品といったものばかりで，彼女達は満たされうる栄養源が断たれていることが暗示されている．この飢餓感は彼女達の欠如感の表現ととらえられるべきものである．

ピーターとの関係が深まるにつれマリアンが物を食べられなくなっていくプロセスは興味深いところである．その原因が，マリアンがピーターに「食べられてしまう」という無意識の感覚であることが読者にはさまざまな場面を通じて伝わってくる．このあたりの事情を少しのぞいてみよう．たとえばマリアンが学校時代の友人レン（Len）をパークプラザの屋上バーでピーターに紹介するところがある．2人の男達は肝心のマリアンそっちのけで夢中になって狩猟やカメラ（この2つはピーターの趣味だ）の話をはじめる．以下の言葉はピーターのものである．

そこで放してやってからズドンさ．一発で心臓を撃ち抜いた．残りは逃げてしまってね．そいつを拾いあげると、トリッガーが「臓物の抜き方だがね．腹を真一文字に裂いてしっかり強く振れば全部抜け落ちるよ」って言うのさ．そこでぼくはナイフをサッと開いたのさ．いいナイフでドイツ製のスチールさ．腹を裂いて後ろ足を持ち，パシッと一振りしたんだ．ムチを振るみたいにね．すると次の瞬間，そこらじゅう血と臓物だらけ．ぼくのからだにもすっかり．ひどい修羅場だ．ウサギの臓物が木からぶら下がって，木という木が何ヤードも真っ赤なのさ・・・（69）

話しながら男たちは「歯」を見せて笑っている．食べる行為とつながる「歯」もこの小説では「力」を暗示する重要な小道具だ．このときマリアンの目の前に森の情景がはっきりと浮かび上がる．追われているウサギ．だがウサギはもういない．男たちの顔は血でよごれている．このあとマリアンは化粧室に立つのだが、化粧台の上の水が涙だとわかりびっくりする．彼女は自分がなぜ泣いているのかわからない．突然パニックに襲われて彼女はパークプラザから逃げ出して走り始める．どうしてかわからないが止まらない．これに引き続く章で二人の男達が彼女を追い始める．狩猟は彼らにとってお手の物だ．ウサギのように確実に追い詰められ，捕らえられるマリアン．これは前章の狩猟の場面をそのままリプレイしたものであることがわかる．同時にそれは性的狩猟，すなわち求婚の儀式をなぞったものでもあることも示唆されている．このあとのピーターの反応である．「きみがヒステリーのタイプだとは知らなかったな」，「きみの悪い点は女らしさを拒否していることだ」とマリアンを叱りながらも，狩猟本能に火がつけられた彼は，捕らえた獲物は逃すまいと，それまではまだ独身生活を謳歌したいと思っていたはずなのに「どうだろう・・ぼくたち結婚しては・・・」と突然プロポーズするのである．この時マリアンを見つめるピーターの目は「動物みたいに輝いていた」のであり，「ちょっと不気味なものでもあった」．

プロポーズを受諾したマリアンは自分がそれを望んでいたのだと思い込もうとする．少なくともこれで年金リストから自分の名前が永久に消されるであろう事に満足する．マリアンに異変が起きるのはそれからである．みるみる「女らしく」変身していく彼女をもう一人のマリアンがじっと見つめている．結婚式の日取りをいつにしたらいいだろうかとピーターに聞かれた彼女は，「大事なことはみんなあなたにお任せするわ」（90）とフランネルで包んだようなやさしい声で答える．別のマリアンがひどく驚く，という具合だ．

捕らえられたウサギのように内部がくりぬかれ、空っぽになったマリアンが浮遊するような身体感覚を持って現れるのが第2部である．結婚が決まってから彼女はまったくすることがなくなってしまう．というより，何かをするという主体的意志が消えうせてしまったのだ．ただ一つやったことは、身の回りの整理である．新しい生活にそなえて，それまでの自分を作ってきたあかしのような多くの古い品々をガラクタとして捨ててしまう．その

中には学生時代の本も含まれていた.

これまで一人称「わたし」で書かれていたこの小説が,ここで三人称「彼女」に切り替わるのはいかにも暗示的である.自分が他者の欲望の対象と感じたとき,「わたし」の経験は「わたしではない誰か他人」のストーリーの中に取り込まれてしまうということである.ここにはマリアンの主体に関する危機が浮き彫りにされてくる.マリアンは「食べられる」のを待つだけなのだ.ゴシックの効果を援用して書かれた19世紀を代表するラブロマンス『ジェイン・エア』のように,望むはずの結婚式が近づくにつれ小説は不気味な様相を帯び始める.[6] ピーターに殺されるかもしれないという漠たる恐怖がマリアンの意識に張りついていくプロセスは興味深い.その極めつけがレストランでの二人のロマンチックディナー(であるはずの)の場面である.もうメニューなど選べなくなっているマリアンは「あなたが決めて」とピーターにすべてお任せだ.そのピーターはといえば自分のワイングラスの血のような「赤い液体の豊かさ」とテーブルクロスの白との対比を満足げに見つめている.話題はこれからの二人の「新しい生活」のことだが,マリアンは上の空だ.というのは、彼女はピーターの食べる行為に目を奪われていたからである.

ピーターはもうほとんど食べ終わっていた.ナイフとフォークを持つ有能な手が,力を正確に調整してきちんと肉を切っていくのをマリアンは眺める.なんと巧みに切ることか.引きちぎることもギザギザの切り口を残すこともない.でもやはり,切ることは暴力的な行為だ.(150)

こう思った時,マリアンには食べかけの自分のステーキが突然「血で真っ赤な筋肉,もとは動いて草を食べてた実在の牛の一部、頭を打たれ殺された牛」に見えてくる.顔が青ざめていくのが感じられ,彼女は肉を受けつけなくなってしまう.「バカな話,誰だって牛を食べるのはあたりまえのことよ.生きていくには食べなきゃ.肉はたんぱく質やミネラルが多くて身体にいい」と自分を説得するが,効果はない.「どうしたの,きみ?」と問うピーターに「おなかがすいていないみたい」と力なく答える.それを聞いたピーターは微笑むと,自分の「すぐれた胃の容量」を楽しげに意識しながら食べつづけるのだ.マリアンは一人になったとき,ようやくキッチンのテーブルでぴん入りのピーナッツバターなどをわびしく食べることになる.

マリアンにはまだはっきりと認識されていないが、彼女の食欲喪失の原因は皿の上の牛の肉塊に重ねられる自分自身のイメージとそこから出てくる恐怖感である.ピーターがナイフでステーキを見事にさばいて行くやり方——「まっすぐな細い切り身にしてからきれいな立方体に分割していく」のを見ていると,マリアンは料理の本の見開きにある牛肉の部位を連想する.体を線で分けて,どの部分から各種の肉が切り取れるかその名称を示したものだ.「生まれたときからすでに切りとり用に線が引かれ、測定されている牛」は実はマリアン自身なのである.

ここに明瞭に示されているのは,男女の社会的関係性にひそむカニバリズム的性格である.作者は,この関係を「食欲」と「無食欲」,「食べること」と「食べられること(食べ物)」の関係の力学を通じて描こうとしている.強いものはただ強いだけでなく,弱者を殺して,食べる.『食べられる女』では女性とその身体は「食べ物」と同義である.たくましいピーターは、自分の食欲に満足しながら申し分ないほど上品に血の滴る肉塊を平らげていく.彼が社会の法に携わる人間であることは偶然ではない.作者はこの社会で性役割の関係が暴力的様相をも帯びていながら,それが文化という衣をまとってまことしやかに通用している様相を巧みに暴き出している.まさに『食べられる女』の主要テーマは象徴的カニバリズムなのである.[7] マリアンが獲物のように追いかけられる場面でも見たように、それは男女の性的関係にも当てはめられている.人間と動物間で行われることが人間同士の間でも行われている.略奪的狩猟家はたとえ食べるものでなくても動物を殺す.それは力の誇示だけのため,つまり自分は強いということを示す儀式のようなものである.儀式としてのカニバリズムについては文化人類学者の間でも諸説があるが,はっきりしていることはそれが社会の統御,力の維持に関係する行為だということである.アトウッドがこの小説のあちこちで「歯」をむき出したピーターを意図的に描き,マリアンの肩をかんだり(マリアンは驚くのだが、歓楽のしるしなのだろうと自分を納得させる場面),夜のプロポーズの場面を含め、彼をドラキュラのイメージにも重ねていくのは単なるエンタテイメント性を狙ったものではない.社会が愛でるラブロマンスのプロットにひそむ「恐怖」の意味を鮮明にするためなのである.

4 食べ物（商品）とジェンダー

マリアンが食物と結びつけられているのはこれだけではなく、彼女が働くシーモアサーベイ（Seymour Surveys）という職場を通じても行われている．商品の市場調査を手がけるこの会社は「アイスクリームサンド」みたいに三層に分かれている．上の階は重役や心理学者たちで全員男性，下の階は機器類が置かれ，その間にマリアンたち女性の働く部であるおいしく「あまったるい中間層」がある．上の階へ移動の道が閉ざされている女たちの職場でのこの位置は社会の構造を示唆するものでもある．さらにここではビールやライスプディング，下剤といった「食べられるもの」と生理用ナプキンなどの「身体」に関連する商品の市場調査を行っている．マリアンはこの仕事に従事する中で，商品とは企業によっていかに「男らしさ」「女らしさ」のジェンダーカラーを付与され市場に出されるのかをいやというほど知らされる．あるとき彼女は，大手ビール・メーカーが市場に出そうとしている新銘柄の宣伝キャンペーンの一環としてのコマーシャル調査に携わる．BGM合わせて深い声が次のように調子をつけて宣伝する．

本物の男――狩猟や魚釣り，またはただ素朴な昔ながらの休息を楽しむ本物の男の休日には，健康で快い味わいのビール，心に染みる男らしい味のビールが必要です．グイーッと飲む最初のさわやかな一口，それだけでムースビールがたえずあなたの求めてきた本物の快適なビールだとわかるでしょう．（26）

品物自体とは無関係なジェンダーの味付けをされたコマーシャルのうたい文句が消費者の心に深く染み込んでいく．欲望をそそるような女性の下着の宣伝についても同じ事でマリアンはうんざりしながら同時に，品物だけでなく人間の心もまた「商品化」されている事実に気づくことになる．ピーターという男性にしても，完璧な男らしさの<ナイス・パッケージ>である．数時間ドライブして草地へ行きマリアンを求めてくる趣味は「男性アウトドアマガジンの狩猟物語」から，羊の皮のうえのときは「派手な男性大衆雑誌の記事」，バスタブのときは多分「殺人ミステリー小説」からヒントを得ていることをマリアンはうすうす気づいていた．しかしそのマリアン自身の意識もまた資本主義社会の価値体系の中にどれほどしっかり取りこまれているかに彼女が気がつくのは大分後のことである．その頃マリアンは気が進まないながらますますピーターの好みに合わせるようになっていた．彼の家で行われる婚約披露パーティーのために美容院に行き，まるでこれから売りに出す商品のように手を入れられ，ゾウの角のようなカールを作ってもらう．これに呼応するかのようにそこに置かれてあった雑誌の裏表紙から巨大な乳房の金髪女性が語りかけている．「少女よ！　成功をめざせ！　本当に世に出て行きたければ，バストを発達させよ・・・」．身体の商品化．真っ赤な短いドレス，重いイヤリング，マニキュア，凝った化粧，エインズリーの特訓によるまぶたをたらした微笑み方で自分を飾り立て「通信販売のカタログの女」のようになったマリアンを，ピーターは「マリアン，きみは完璧にすばらしい」と上機嫌で迎えてくれた．ところが，もう一人の男ダンカン(Duncan)の言葉にマリアンははっと我に返る．彼は，このパーティーは「仮装舞踏会だったの？」と辟易したように言ったのだった．

実はこの小説では，マリアン/ピーターの関係展開と同時進行するもう一つの関係がある．マリアンがムースビールの市場調査のとき知り合い，後にまたコインランドリーで偶然出会うダンカンとのそれである．「英文科の大学院9年目というあわれな存在」と自己紹介した男性である．「ほんとうの真理を発見する」と意気込んで大学院に進学したが，事実はすべてが研究され掘り出されているため論文が書けないでいる．やせて少年のように見える26歳の不思議な青年である．マリアンが彼に奇妙に引きつけられていったのは，彼がまったくジェンダーカラーに染まっておらず，要するに市場調査にはまったく役立たない男だったからである．例のビールのコマーシャルの中の文句<健康で快い味わい>から何を思い浮かべるかを調査員のマリアンがたずねたとき，「人食いの物語だ．・・・夫が妻の愛人を殺す．または妻が夫の愛人を殺す．そして心臓を切り出してシチューかパイにつくり，銀の皿に入れて妻か夫に食べさせるんだ」（53）とダンカンは答えたのだった．彼の「家族」もマリアンには興味深いものであった．同じ大学院生である年上の男性トレヴァー(Trevor)とフィッュ(Fish)がダンカンの父母役をやっている．ジェンダーの秩序をかく乱するようなこの家族のディナーにマリアンが招待されたとき，彼女が聞かされるのが『不思議な国のアリス』の解釈，

すなわちこの物語は「性的アイデンティティの危機」を描いたものであり,「小さな女の子が暗示的なウサギの穴に落ち，いわば出生以前の状態になって，自分の役割を見出そうとする話」だというのは後の展開を考えたとき示唆的なものといえる.

このダンカンは無論ラブロマンスにつきものの恋人ピーターのライヴァル役として登場している. 二人は最終的にラブホテルに行くことにもなるが，彼らは決して恋人の関係ではない. 肉体的関係は成立しないし，マリアンの救い主にもなることはできない. にもかかわらずマリアンが彼に必死に会いに行く理由は何だろう. マリアンはピーターとの関係で自分の主体が次第に見失われていく恐怖から逃れるためダンカンに会いに行く. つまり彼はマリアンの中の無意識，あるいはもう一人の自己，分身と考えられる. マリアンは物が食べられないにもかかわらず，あまりやせたふうでもない. ところが食べることのできないマリアンの食物を代わって食べてやるダンカンは,「飢餓」をそのまま人間にしたようにがりがりにやせている. またマリアンの無意識を解釈し,「きみはおそらく体制に反逆する若い世代の代表なんだ」と食べられない原因を気づかせてくれるのも彼なのである.

マリアンが最終的にピーターから逃れるのは，先の婚約披露パーティーで美しいマリアンを彼がカメラで撮ろうとした時であった. フラッシュの閃光は猟師の銃弾と同じものだ.「彼が引き金を引いたが最後，彼女は動き止められ，その格好，その姿勢のまま，永久に固定されてしまう」(245) この恐怖でマリアンは外に飛び出し，ダンカンのもとに走るのだ. 実はこのパニックが起こる決定的要因がもう一つあった. パーティーの席でマリアンはずっと，ピーターとのしあわせな生活の未来に何があるのか懸命に心の中を探りつづけていた. 長い捜索の果てにやっと見出した情景が以下のようなものである.

右手のドアをあけて中に入る. 45歳で頭ははげかかっているが，まだピーターとわかる男が片手に長いフォークを持って，バーベキューのそばの明るい日だまりに立っている. シェフに白いエプロンをつけている. 庭に自分の姿を注意深くさがすが，見つからない. そうわかってゾッする.

いや，これはきっと違うだろう. まだ部屋はあるはずだ. すると庭の向こう側の生垣に別のドアが見える. 芝生を横切り，いまはもう一方の手に大きな肉切り包丁を持った動かない人物の後ろを通って，ドアを押し開け中に入っていく. (243)

これがマリアンが心の中を捜索して見つけた未来だ. ピーターの正体は，妻を殺して食べてしまうあのグリム童話の「青ひげ」[8]であったのである. フォークを持ち肉を焼いているピーターと，肉切り包丁を持ったもう一人のピーターの姿ははっきりとそれを告げている. 要するにマリアンはもういない. 殺されて食べられてしまったのかもしれない.

救いを求めて行ったダンカンはしかし,マリアンの窮状に驚くほど無関心だ.「ぼくになにをしてほしいんだ？何かしてもらおうと期待しちゃいけない」と言うだけである. ヒステリーの発作を起こすか，泣きつこうかと思うマリアンを制して「演技」はやめて散歩にいこうと歩き出す. 彼らの会話はマリアン自身の内面の葛藤といってもよい. ピーターのもとから逃げ出して，これから何をしなければならないか決めかねているマリアンに「ぼくに聞かないで. きみの問題だから. きみはほんとうに何かする必要があるようだね. ・・・だがこの袋小路はきみ自身の個人的問題，みずから招いたものだ. 自分で脱出の道を考え出さなきゃならない」とダンカンは突き放す. 犠牲者はその犠牲者の立場に甘んじている責任にも気づかなければならない. 結局のところ女性自身も消費文明の中にどっぷりと身を浸し，自ら進んでその価値観に従っているところがある. マリアンはみずからの責任を引き受け，何事かを自力でやらなければならない. こう決意する彼女の反面教師となるのもダンカンである. 現実を逃避して自分の殻に閉じこもるダンカン. 巨大な虚無をじっと見つづけるような，今にも消滅しそうにやせた彼の姿は，無食欲の状態が続くマリアンの近未来を示すものに他ならない. それは死である.

こうしてマリアンはそこにダンカンを残し，自分の家に戻ってくる. 彼女は「生き延びる」ために行動を起こす. まずスーパーに出かけ買い物をして，キッチンでケーキ作り始める. 優雅な女性像のケーキはアイシングでピンクのドレスまで着せられ見事な出来栄えになる. パーティーを抜け出したマリアンに対しひどく怒っているピーターがやってくる. マリアンは事の経緯を一切説明しようとはしない. ただうやうやしくこのケーキを差出し,「あなた，わたしを破壊しようとしていたでしょ. 私を食べようとしていたの. でも私の身代わりの品を作った

のよ．あなたがもっと気に入るものよ．これがほんとにあなたがずっとほしがっていたものよ，そうでしょ？フォークを持ってくるわ」と自分の思いを自分の言葉で告げるだけであった．驚いたピーターは目を大きく見開き何もいわずに去っていく．

マリアンが突然空腹を覚えるのはこの時である．彼女は自分の身代わりであるケーキ「食べられる女」をじっくりと味わいながら食べ始める．「咀嚼し，呑み込むことはこの上なく楽しいことだった」．大皿に乗せられた死体にフォークを突き刺し，胴と頭を手際よく切り離すマリアン．そこにやって来たダンカンも一緒になり，二人はおいしそうに食べるところで小説は閉じる．解釈に戸惑うような結末の中にも，さまざまな暗示的事柄が浮かび上がってくる．重要なことは，自身の身体が栄養補給を必要としているというあたりまえのことにやっとマリアンが気づくということである．それまでのマリアンのとって，身体は自分のものではなかった．というより，頭と身体が切り離され，この消費文明の価値観に沿おうとする意識のみで生きていた．身体は魅力的「商品」として売れるよう，女性らしさというジェンダーの糖衣をまぶされショーウィンドーに並べられる「食べ物」になっていたのである．『食べられる女』という題名の意味はまさにこのおいしいケーキのことなのである[9]．マリアンは，意識や理性から切り離された身体が猛烈な反逆を試みているのに，それに思いを寄せることができなかった．先にもあげた，水のような液体を見るまで自分が泣いていることもわからない彼女の姿はその事実を象徴的に表している．死体で試みている首と胴体の切断の儀式は，それを認識したマリアンの確認行為とも取ることができる．身代わりのケーキ，すなわちかつての自分自身に向かってマリアンは，「とっても食欲をそそるわ．それがあなたに起こること，食品であるために起こることよ」と言い聞かせるのだ．この最終場面についてさらに付け加えるならば，ダンカンと二人で食べるティーパーティは，食べる行為と密接に結びつく性の関係のまったく新しい展開を示唆しているものとも受け取られる．

この作品の扉辞として，「調理台の表面（大理石が望ましい），道具，材料，それに指も，作業が終わるまで冷たくしておくこと・・・・」というI・S・ロムバウアー，M・R・ベッカーの『料理の楽しみ』の中の「パイ生地の作り方」からの引用がのせられている．それは「食べられる女」のケーキの焼き方を直接的には示したものにほかならない．がそれと同時に，女性の経験を素材にまったく新しいストーリーという料理をつくり，真の栄養源として女性達に供する意図が当時の作者にあったであろうことは想像に難くない．個人的な問題ははすなわち公的，政治的な問題であるであるという当時のフェミニズム運動のスローガンそのままにアトウッドはこの小説の男女の登場人物の背後に社会を大きくクローズアップすることに成功している．

結　語

『食べられる女』の結末はしかし単純なものではない．マリアンが例のケーキ作りに先立ち，行った象徴的な行為がある．それは「鏡に向かってニッコリし，歯をむき出す」ことであった．彼女が「犠牲者」の状況から自力で抜け出し「生き残る」ためにやらなければならないことは，まず「食べる」ことだった．他の生命や自然を犠牲にして咀嚼するというカニバル的行為に自らも参与しなければならないのである．最後の場面はその意味深い儀式とも言える．生きること，生き残ることは，決してきれい事ではない．男女の関係性の問題も，強者，弱者という単純な見方で片付けられるものではない．この問題は以降のアトウッドの作品にずっと引きつがれ，彼女の複眼的まなざしが作品をいっそう複雑なものにしていっている．それはこの世界の社会的混沌そのものを映し出しているとも言える．世界は，1990年初頭以来，劇的な政治的展開を見た．東欧圏の崩壊，旧ソ連の一党独裁体制の終焉．ネルソン・マンデラが気の遠くなるような長い拘束を解かれ，アパルトヘイトも過去のものとなった．社会の中の弱者はその存在を示すことができるようになった．ほんの幕開けに過ぎないこのような出来事が突きつけてくるものは，自由を欲する個人（および集団）同士が，征服や同化ではなく，いかに融和，共存ができるだろうか，という問題である．イスラエル，アイルランド，パキスタン，アフガニスタン等々．このような命題を国家形成期から抱えてきたのがカナダである．多様性，多元性への寛容さを養い，多彩な文化のモザイクという不安定で流動的なアイデンティティをあえて引き受けようとするカナダはアトウッドの創作空間としてこの上ない肥沃な場を提供しているように思われる．

テキストはMargaret Atwood, *The Edible Woman* (1969; London: Virago Press, 1980) を使用した．本

文中の引用頁数はこの版による．日本語訳は『食べられる女』（大浦暁生訳，新潮社，1996年）を参照した．

注

1）欧米マジック・リアリズムの旗手として，またフェミニスト作家としても名高い Angela Carter（92年に肺癌のため死去）が Atwood と互いに影響し合う友人関係にあったことが今夏（2001年8月）筆者を含む共同研究グループによるインタビューで明らかになった．

2）この文学論はカナダの文学を語るのみならず，Atwood の文学の方向性を示す極めて興味深い書となっている．

3）序文で Atwood は "I myself see the book as protofeminist rather than feminist" と述べている．

4）Virginia Woolf, A *Room of One's Own* (1929; London: The Hogarth Press, 1978) p.16.

5）*Ibid.*.p.17.

6）詳しくは拙論「鏡の像に背を向けて── シャロット・ブロンテ『ジェイン・エア』」『愛の航海者たち── イギリス文学における愛のかたち』（南雲堂，1994年）参照．

7）文学における象徴的カニバリズムを論じたものに Kristen Guest ed., *Eating Their Words* ----- *Cannibalism and the Boundaries of Cultural Identity* (New York: State University Press of New York, 2001) などがある．

8）自分の花嫁を次々に殺して食べてしまう青ひげの物語は現実社会の女性の状況を象徴するとして特にフェミニスト作家たちによって採用されることが多い．

9）もともとは砂糖づくりの新郎新婦をのせたウェディングケーキから発想したものであると作者が序文で述べている．

付　記

本稿は，平成13年度に始まるプロジェクト研究「20世紀英語文学を取り巻く風土の変容とその力学の研究── ──フェミニズムとポストコロニアリズムの視点から」の一環として行われている Margaret Atwood 研究の中間報告である．

Summary

Politics of Eating and Gender System ──Margaret Atwood's *The Edible Woman*

Margaret Atwood's first novel *The Edible Woman* is permeated with food, suffused with scene of characters eating. She brings food and eating (or not eating) into direct relationship with gender and cultural politics, using food and its activities to problematise assumed gender roles of the late 1950 and 1960's in urban Canada. Thus she suggests the predatory nature of appetite and the protest signaled by its lack. This essay attempts to study such symbolism of eating through the experience of her young protagonist, Marian MacAlpin who is rendered in terms of food.